

―特集―

国際交流で広がる まちづくりの輪

内子町国際交流協会は10月、設立30周年の節目を迎えます。

古い歴史的な建物の保存がまだ新しい考え方だった昭和61年、「世界一美しい」と称される町並みを守るドイツ・ローテンブルク市からオスカー・シュエバルト市長（当時）を招いて「内子シンポジウム'86」が開かれました。イベントを機に、町民レベルで国際的な交流を深め、まちづくりを担う人材を育てようという機運が広がりました。そして多くの町民や企業から寄せられた寄付をもとに、平成6年10月に財団法人として同協会を設立。以来、さまざまな国際交流事業を展開しています。

今回の特集では、同協会の事業の柱である青少年海外派遣に関連した「国際交流協会30周年記念事業」の取り組みを紹介します。国際交流が派遣生に、そして私たち町民に与えてくれるものを振り返ってみます。





山岡 沙衣さん
＝上宿間＝

Interview

気持ちが通じ合えたファミリーとの交流

第21回派遣団として参加しました。ホームステイが心に残っていて、私が楽器が好きだと伝えたら、ホストファミリーで同い年の子が「一緒にやろう」とレッスンに誘ってくれました。英語はあまり話せなくても、楽譜と、人への思いやりの気持ちは同じ——。優しいファミリーとのすてきな交流ができました。世界の見え方が変わると思うので、これから行く人にもドイツや日本の良さをたくさん感じてほしいです。



ホストファミリーとの思い出の1枚

国際交流協会の活動の中でも、海外派遣事業はメインとなる活動の一つです。毎年多くの中高生から応募がある中で、作文や面接試験を経て、研修への意欲や知識、表現力などを総合的に判断し、毎年10人程度を派遣しています。コロナ禍で中断して以降、今年は5年ぶりに派遣団を結成しました。内子町とローテンブルク市との友好関係を今後も続けていく上でも、30周年の節目に派遣を再開できること、またOB・OGたちと交流し派遣の意義を再確認できたことも、とても意味のあることだと感じています。

海外派遣で得たものを積極的に発信してほしい



内子町国際交流協会
専務理事 大森希世さん

2014年の第20回派遣団の引率としてローテンブルク市を訪問しました。団員にとって現地の市民との交流はやはり特別な経験で、特にホストファミリーとの別れの日には涙、涙——。「両市町の友好を深める」という事業の大きな目的を成し遂げられたと思える瞬間です。今回の交流会でもたくさんの思い出を聞くことができました。OB・OGの皆さんには、派遣で感じたこと、その経験から気付いた内子町の良さを積極的に発信してほしいです。壮大なことだけでなくもいい、それぞれが感じたタイミングでいいと思います。心の

《海外派遣日程の例》

- 1日目 内子町発→ローテンブルク着
- 2日目 ホストファミリーと過ごす
- 3日目 市長表敬訪問、町並み保存学習
- 4日目 学校訪問、クリスマスクッキー作り
- 5日目 ヴェルツブルク見学
- 6日目 特別支援学校訪問、警察署訪問
- 7日目 ハイデルベルク見学
- 8日目 マイNZ、フランクフルト見学
- 9日目 フランクフルト発
- 10日目 内子町着

中にとどめておくだけではもったいない——。皆さんの声が何かの形で、きっと内子のまちづくりの力にもなるはずです。

30周年の節目に今後の協会活動を考えたとき、より長期的な展望を持つことも必要だと感じます。コロナ禍を経て社会活動がさまざまな変化している今、いいものを残しながら、ニューノーマルを踏まえてアップデートするのでも大事。記念事業では今後、多集いの場などを開く予定です。多くの人と関わりを広げ、深められる交流の機会を、まちの皆さんに提供できればと思います。

30周年記念事業① 海外派遣団交流会

派遣から広がる交流の輪

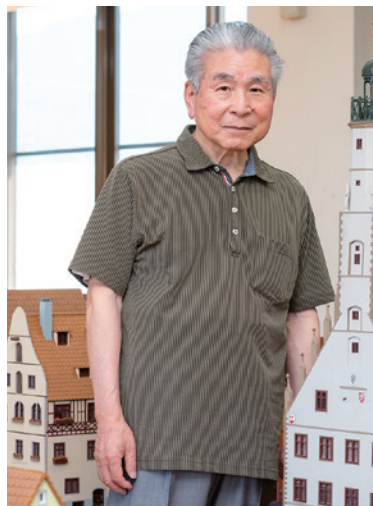
海外派遣事業の歴代参加者などを招いて「内子町青少年海外派遣団交流会」が8月17日、共生館で開かれました。派遣生OB・OGや各回の派遣団団長、引率者など約60人が参加。協会設立30周年の節目を祝うとともに、懐かしい顔ぶれとの再会を喜びました。



平成7年に第1回の派遣団がローテンブルク市を訪れて以来、これまでに320人の中高生が同市などを訪問。約10日間にわたる異国での体験を通して国際感覚を養うとともに、市民との触れ合いを通じて友好関係を深めてきました。

同協会の小野植正久理事長が「私も団長として6年前にローテンブルク市を訪れ、日本との違いを実感した。美しく整備された町の景色、環境への配慮、教育や医療など学ぶところは多い。皆さんもそれぞれの気付きや思いを語り合う機会にしてほしい」とあいさつ。続いて内子町の国際交流員（CIR）として同市との交流に長年尽力したドレーン・アルントさんの発声で、「ドイツ語で乾杯を意味する「プロースト」の掛け声で皆さんとグラスを掲げました。

会場ではドイツ料理が振舞われた他、現地の様子を写真や映像で紹介。参加者同士で当時のホストファミリーとの温かなふれあいを振り返ったり、海外派遣がきっかけで英語教育に携わることになった近況などを報告したりして、それぞれの思い出と学びを共有しました。



模型制作者
相原忠夫さん＝松山市＝

ローテンブルク市を初めて訪れたとき、中世の面影を残す町並みの美しさ魅せられました。専門知識は何もない素人でしたが、すぐに趣味として模型制作を始めました。これまで何度も同市を訪れて、高台から写真を撮ったり、歩幅で建物の寸法を取ったり、配置をメモしたりして資料を集め、設計図を作っていました。まずは350分の1のサイズで配置などを確認してから、主にバルサ材などを使って建物を制作します。初めて挑戦したのは旧市長の館。最初は上手にできなくて、今ある模型は2代目です。

作るのが大変だった市庁舎と並んで、特に思い入れの強い作品ですね。細かいところもなるべく正確に再現したいので、資料が増えたら手直しをします。こつこつ作業をするのが好きで、何よりこのまちが好きだから続いているんでしょう。特に、模型を見た子どもたちが楽しんでくれるのは何よりの喜びです。物語の中のような商店が並ぶ通り、まちづくりを支える技術者の手仕事など、それぞれの感じ方で魅力を見つけてみてください。内子の皆さんにこのまちを知ってもらい、好きになってもえたらうれしいです。

私は古いものを大切にするローテンブルク市の落ち着いた雰囲気がお気に入りです。もつと活発に観光地化されていたら、今のような趣ではなかったかもしれないですね。内子も似ていると感じていて、静かでもいいちですね。内子町はアジアでは唯一、ローテンブルク市と姉妹都市盟約を結んでいます。現地を訪れると市民が内子のことを紹介してくれるなど、住民レベルでのつながりがあることが分かります。これも地道な交流活動の成果であり、皆さんをうらやましく思います。今後の内子町の国際交流活動の発展を、私も見守りたいと思います。



武智 瑞穂さん
＝内子19第1＝

Interview

人を惹きつける力を感じるまち

ローテンブルク市を訪れたことがある夫と展示を見ました。建物や店について熱く解説してくれて「よく覚えているなあ」と感心。それだけ魅力的な場所なんだと伝わってきます。私は傍らで展示されていた看板の写真にも心惹かれました。町並みに溶け込んで一つ一つが繊細。日本とは全然違うものでした。海外はハードルが高いと感じていた私ですが、いつか現地を訪れ、雰囲気を味わってみたいくなりました。



店ごとに違うおしゃれな看板がいっぱい



制作に苦勞した市庁舎も思い入れのある一棟



30周年記念事業② ローテンブルク市ミニチュア展

小さなおとぎ話の世界

中世の町並みの佇まいを今も残すローテンブルク市。その美しさに魅了され、旧市街地のミニチュア模型を制作している相原忠夫さんの作品展が8月11～18日の間、六日市自治会館で開かれました。人々を惹きつける同市の魅力について相原さんに聞きました。

時計塔が存在感を放つ市庁舎、赤い屋根の商店が並ぶ通りなど――。松山市在住の相原忠夫さんは美しい市街地を再現しようと、35分の1サイズのミニチュア模型を作り続けています。これまで計194軒を制作。1軒あたり2、3カ月かけて、屋根瓦や店の商品、軒先に並ぶ花瓶なども細やかに再現しています。42歳の時にローテンブルク市を初訪問した相原さん。「中世の町並みの美しさに感動。帰ってすぐ模型を作ると決めた」と話します。35年かけて完成した「小さなローテンブルク」に、訪れた人からは思わず「わあ」と声が上がります。会場ではドイツのくるみ割り人形などの民芸品や、市内で撮りためた写真なども展示。参加者は好きな建物や眺めを探したり、写真と模型を見比べたりして、絵本の中のような世界を堪能しました。展示会には8日間で約500人が来場。「屋根の形や壁の模様が日本とは違って不思議。文化の違いを感じた」という子どもや、「子どもをぜひ現地に連れて行ってあげたい」という親子連れなど、多くの声が寄せられました。



内子町国際交流協会が目指すもの——

「住んでいてよかった」と思える まちづくりのための人づくり

国際交流協会の設立にあたり設立準備プロジェクトメンバーとして奔走し、現在は同協会副理事長を務める横田光敏さん。30年の歩みを振り返り、国際交流の魅力と、協会の存在意義について語ってくれました。

皆さんのための国際交流協会で まちも心も豊かにする出会いを



内子町国際交流協会
副理事長 横田光敏さん

《30年を振り返って》

この30年を振り返ると、「子どもたちのために」と寄付をいただいた町内外の皆さん、企業の皆さん、運営に携わり知恵を貸していただいた先輩など、多くの人に支えられてきたことを改めて実感します。発足当初、まだ子どもが小さかった私は「この子が大きくなるまで続いているだろうか」と不安もありました。しかし今では第1回の派遣生が引率者として子どもたちをバックアップするまでになりました。皆さんのご協力への感謝と感慨深い思いでいっぱいです。

《外の視点がまちを豊かに》

町外からUターンした私はあるとき、咲き誇る桜が水面に映る何気ない風景に、思わず心を奪われました。妻に「何を都会ぶって」と言われてしまいました。だが、10年ほど町外にいた私にとっては、当たり前ではありませんが、外を知らなければ、他人を知らなければ他人の視点で物事を見つめられます。比較対象が増えることは自分自身で幸せを見つけることにもつながるし、「幸せ」と感じる価値観を、誰からもらうことだってできます。よその視点は自分にも、地域にとつ

《まちづくりは人づくり》

でも大切な財産となるはず。次の世代がまた面白い価値観を作ってくれるのも楽しみです。国際交流の魅力は、自分以外の「外」の視点を得られること。町内でもさまざまな交流の機会をつくることで、内子にいながら外とつながり、内子というエリアのボーダーを取り払ってくれます。小さな取り組みの継続と、そこで得るものの積み重ねが、ワクワクするまちづくりにつながると信じています。

国際交流協会はまち全体のもので、住んでいる皆さん一人一人のためにあります。協会の理念は「まちづくりは人づくり」。住んでいてよかったと思える内子町を目指し、まちづくりを担う人づくりとして、さまざまな学びを得るために協会を活用してください。海外派遣事業はその取り組みの一つ。派遣生がそれぞれの内側に積み上げていてほしいと思います。そして将来、自らの考えで行動していく中で、それぞれの立ち位置で、ふるさと内子に思いを向けてくれたらうれしいですね。

30年前、内子の将来のためにと多くの人が知恵を出し合い、資金を寄せて設立された内子町国際交流協会。県内で3番目という早さで立ち上がった組織には、まちの皆さんの未来への大きな期待が寄せられていたことが分かります。横田さんは「協会設立の趣旨を伝えて回り、多くの協力を得ることができたのは、学びや頑張りの後押ししようという土壌が内子町にあったから」と当時を振り返ります。

10代の多感な時期に得られた海外での学びは、派遣団の皆さんの心にたくさん刺激と温かな思い出を残してくれたことが、OB・OGの皆さんの話からも伝わってきます。彼らが派遣先で深めた友好関係が輪となって、私たちとローテンブルク市との距離をまた一歩、縮めてくれているのではないのでしょうか。今後も内子町国際交流協会では30周年を記念した催しが予定されています。ぜひ皆さんも国際交流の輪に加わってみませんか。